

〔環境と幼児観〕

ヨーロッパ絵画にみる幼児発見の系譜とその背景 —— ルネッサンスからロマン主義まで ——

藤田 博子
(浪速短期大学)

Ⅰ. 研究の端緒

フランスの歴史家、フィリップ・アリエス(Philippe Ariès, 1914-) は、主著『子供の誕生』"L'ENFANT ET LA VIE FAMILIALE SOUS L'ANCIEN RÉGIME" 1960の中で、絵画に例をとり、「ほぼ、17世紀までの中世芸術では子供は認められず、子供を描くことが試みられなかった。だが中世芸術における子供の不在は、器用さが欠けたため、あるいは力量不足のゆえではなく、それよりむしろ、この世界のなかに子供期にとっての場所が与えられなかったと考えるべきであろう。」と述べている。

アリエスは、中世を17世紀までとし、子供期の発見もそれ以降としている。そして、子供期発見の現象については述べているものの、その発見に繋がる時代の思想的背景については、ほとんど論述していない。また聖母子画のなかの幼児も研究の範疇からはずしている。

本研究においては、中世を12・3世紀までとし、14世紀以降17世紀までをルネッサンスとして、精神上重要な一時期として位置付け、アリエスが書かなかった、ルネッサンス期の人間の発見に連なる幼児発見の系譜を、時代の思想的背景と照らして考察してみようと思う。

この場合、聖母子画にあらわれる幼児も、描かれた時代の子供観の反映として考察の対象としたい。

ここで、重要なことは子どもの価値の発見は、時代で明確な線を引くことはできない。なぜなら、思想史の様相は合理主義と非合理主義の相剋を絶えず繰り返しながら進展していくものだからである。それゆえ、時代的背景と照らしながら、絵画にみる幼児発見の軌跡を追って見ようと思う。

Ⅱ. イタリア・ルネッサンス

絵画のなかに幼児が生き生きと描かれ、それが光を点したように輝いてくるのは、ルネッサンスとロマン主義の時代である。そして、この時代に共通していることは、古代ギリシア、わけてもプラトン主義へのあこがれである。これらは只単に絵画ばかりの問題ではなく、文化全般を通じて、古代ギリシアの叡智への憧憬が大きな波瀾をとよめている。

ルネッサンスとは14世紀から16世紀にかけて、イタリア、なかでも、フィレンツェを中心として興り、やがては、全ヨーロッパをもつつみこむことになる巨大な文化運動の波瀾である。絵画について言えば、ビザンチン美術の束縛下、イタリアの画家、チマブエ(Giovanni Cimabue, 1240-1302)、ジョット(Giotto di Bondone, 1266-1337)等によって道を拓かれた、初期ルネッサンスの合理主義の精神は、マサッチョ(Masaccio, 1401-1429)、マンテーニャ(Andrea Mantegna, 1431-1506)などの巨匠たちによって、さらに合理と写実の手法を深めていく。中世のイコンに比べ、チマブエの絵画には精神的なるものの移入と、合理的写実の技法が現れはじめる。図-1はロレンツェッティ(Pietro Lorenzetti, 1280-1348)の『荘厳の聖母』である。夢見るように甘美な聖母子は、互いに微笑みを交わし、ようやく言葉の出始めた幼児は、そのもどかしさに母の口から出る言葉を握もうとしている。母は幼子のしぐさや、それにつながる成長を慈愛に満ちたまなざして見守っている。まことに人間味あふれた聖母子である。図-2はベルナルド(Bernardo Daddi, 1290-1348)の『聖母子』である。優美なやさしさと精神の輝きがほのかに見え始める。図-3、マンテーニャの『割礼』のなかには、指しゃぶりをしている幼児が、今日でも通用しそうな幼児服と靴を着けて描かれている。やがて聖母子画はその象徴である光門をかなぐり捨てて、生き生きと人間の輝きを漲らせてくる。中世絵画にみられる子ども



(1280-1348)

図-1. ロレンツェッティ



図-2. ベルナルド (1290-1348)



図-3 マンテーニャ (1431-1506)



図-4. ポライウオロ (1429-98)



図-5 レオナルド・ダ・ヴィンチ (1452-1519)

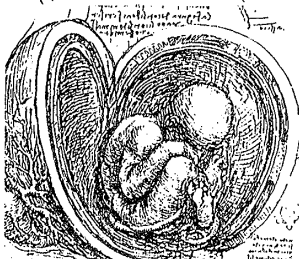


図-6. ボッティチェッリ (1444-1510)



図-7 マイナルディ (1460-1513)

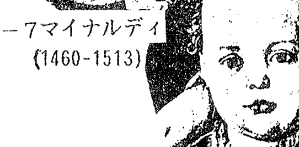


図-8 レオナルド・ダ・ヴィンチ
ブロンツィーノ (1532-72)

らしからぬ幼子イエスは、みどり児らしい四肢を備え、窮屈なむつきや衣服から解放され、ゆったりとしたローブや、素裸といったすこぶる自由なみなりで、母なる人の胸に顔を埋めることも、その乳房を含むことも、そのかいなにまどろむことも、指しゃぶりまで許されてくるのである。図-7. マイナルディ(Sebastiane Mainardi, 1460-1513)の聖子は指をしゃぶりながら、しかめつらをしている。実に人間の子そのままである。やがて、フィリッポ・リッピ(Filippino Lippi, 1466-69)、図-4. のボライウオロ(Antonio Pollaiuolo, 1429-98)、図-6. ボッティチェリ(Sandro Botticelli, 1444-1510)、図-5. のレオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci, 1452-1519)、ミケランジェロ(Michelangelo Buonarroti, 1475-1564)と、写実は人体解剖の科学を深め、ありのままに子どもの肉体を描きはじめる。科学的な子ども理解と、発達段階の理解はそのまま幼児の認識、いわゆる、幼児の発見に繋がっていった。

Ⅲ. ルネッサンスの精神

ルネッサンスの根本精神は人文主義Humanismである。これは、人道主義、人本主義(人間が基本)、人類主義と同義であった。キケロ(Marcus Tullius Cicero, 106-43B.C.)は、Humanitasは自然的素質だけでなく、自然から恵まれた自然的人間性をさらに鍛えあげて、本当の意味での精神の高貴性へと自覚的に自己形成していかなければならないと説いた。それは人間の陶冶可能性へのめざめでもあった。ここでは、たえず自己陶冶する理念の強い人間性が要請された。ゆえに、復活、復興の尊重は、教育思想でもあったのである。ルネッサンス・ヒューマニズムは人間の意味をコペルニクス的に転換させた。それは同時に、人間の自由について、さらには、人間の教育についての視を大きく転換させたのであった。人間に教育・陶冶の可能性を見出し、自然(素質)より教育を優位に置くことは、そのまま、神より人間を優位に置くことでもあった。人間は世界の中心に位置したのであった。また、自他の人格への目覚めは、幼児や老人、心身に障害をもった人々の人格の尊重に繋がっていった。

当時イタリアにおいては、人口を数えるとき、他の国のようにかまどの数とか、兵役に服する能力の数とか、自分の足で歩ける者の数によるのではなく、anima(たましい・個々の人間)の数で数えられた。この時代こうしたことは画期的なことであった。

このように人間の教育の可能性、陶冶可能性、教育の必要性、人格の尊厳が認識されると、いやがうえにも、教育の適時性としての、幼児期の重要性、animaとしての幼児の人格の尊厳が認識されることになる。それは、幼児発見の大きなきっかけとなった。この時期から、絵画のなかの幼児たちは、人間としてのかがやかな光を漲らせはじめる。

Ⅳ. ルネッサンスからロマン主義へ

イタリアに復活した「人文主義」は、アルプスを越えヨーロッパ内部に伝わっていった。そして北方ルネッサンスは、偉大な教育学者エラスムス(Desiderius Erasmus, 1466-1536)を生んだ。彼の理性(ratio)内在論は中世以来の子供観を大きく変換させた。この時代を代表する画家にウェイデン(Van Der Weyden, 1399-1464)図-10. ゴッサート(Jan Gossart, 1478-1533)ダヴィッド(Gerard David, 1450-1523)図-11. オルレイ(B. Von Orley, 1492-1542)図-12. がある。これらの聖母子画のなかの母たちは、授乳にふさわしい衣をまとい、連珠をみどり児に弄ばせ、当時としては大変高価であり、神聖であったはずの祈禱書をみどり児に踏み躪らせてさえている。みどり児は頬を母の頬へおしつけ、手には「創世記」の禁断の果実を握ってさえている。それらはあたかも、立法よりは愛を、ノモスよりも自然的なるものを希求しているようである。一方、フランス・ルネッサンスは『エミール』の著者、ルソー(Jean Jacques Rousseau, 1712-78)を育て、その教育思想は、図-20. 21. 22. に見るように、聖母子画をうつそみの母子画に変えた。やがてルソーに誘発されたドイツ・ロマン主義は、フレーベル(Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852)と「幼稚園」を生み出したのである。こうした精神史は、図にあげた絵画のなかの、かがやかな幼児発見と双輪をなすものである。

